

---

# 風船と時計と夜空

ヤマダゴロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風船と時計と夜空

### 【著者】

Z4569A

### 【作者名】

ヤマダ「ロウ

### 【あらすじ】

男の言葉三文題（だっけ？）のお題にて。

掴まる物がなかつたから、ただ必死ですがりついていた。  
蛍光灯のコードのような、そんな細い糸でよかつたのだ。  
それさえあれば、こんなにも必死にすがりつく事なかつたのに。

空を仰ぐと星が見えた。ちかちかと輝くソレは、手を伸ばせば掴める……。

ワケねえ。

「歳は取りたくねえなあ……。」

俺は溜め息をついて、また空を見上げた。

月が追い掛けてくると怖がつたのは、何歳までだつたか。

この世の全てが未知なもので満ちていた。

自分で自分の事が分からず、怖がっていたものだ。

「自分が宇宙人じゃないかと疑つてたなあ。」

自然に口元に笑みが溢れた。

そんな事あるわけないのに。

「何でそんな事考えたのかなあ……。」

子供の考えは理解出来ない。

昔を思い出しながら、一人にやにやと道を歩く。そんな俺の姿はえらく不気味だらう。

だが、子供の頃を考えてみたら、不思議と色々な事を思い出して來た。

始めて一人で寝た夜。

友達との語らい。

ザリガニを取りに近所の川まで遊びに行つたし、そちら辺を走り

回った。

鬼ごっこに元気んけんぱ。

新聞紙を丸めてちゃんとぱりぱりなんていつのとも流行ったなあ。

思い出せば、かなり時が流れたように感じるし、僅か一・三年前の事のよつとも感じられる。

俺は生まれた時から、多分ずっとこの町で過ごしてい。変わらない町並み。見慣れた風景。だが確実に町は変わつて、人も変わつた。緩やかに訪れる変化は、俺達にそうと気付かせない。それがなんだか寂しくもあり、愛しくもあつた。少なくとも今は、その変化の過程は昔を振り替えれば思い出せるのだ。

なら別にいいじゃないか。何を不安がる?

俺は何を忘れた氣になつているのだろうか?

気が付いたら、家の前を通り過ぎていた。

思い出に浸りすぎたのか。考えすぎだ。ぼんやりしている。しつかりしなくては…。

すぐに踵を返して、歩きだした。

「あんたって、肝心な所でいつもそいつ

「え…?」

どこから少女の声が聞こえた。俺は慌てて振り返つたが、誰もいない…。

気のせいだらうか…?

「でも、私はあんたの事。あんたのそいつの所。かなり好きよ?」  
「気のせいでもいい。  
夢でもいい。」

それでも、なんでもいい。

この声は…。

「だから、忘れないで。約束だよ。」

忘れていた。

あんなに一緒に居たのに。絶対に忘れないと誓つたのに。  
指先に、ふわりと暖かいものが触れる。俺は知らずにそれを握り  
しめた。

頬に冷たい物が流れる。

風の冷たさと重なり、その一筋を痛く感じた。

彼女の名前を覚えているかい？

焼けた肌に、黒く艶々とした美しい髪。

しかし、生まれもつてのくせつ毛で、それが嫌だと。何度も口にし  
ていたのを覚えている。

だが俺は、その髪が好きだった。

からかうようにその髪を触ると、ふくれたように彼女は頬を膨ら  
ませた。

そしてすぐに微笑むと、頬を赤くして殴りかかってきた。

「気にしてんだからやめてよっ！――」

殴られた頬が痛かつたが、それでもやめたりはしなかつた。

「どうして忘れてしまったかなあ？」

いつも一緒に居たね。

好きとか、愛してるとか、そういう気持ちはよく分からなかつた  
けれど。あの時君に感じたこの気持ちはそれに近かつたんだと思う。

「大きくなつても一緒にいようね」

なんの保証もなかつたけれど、子供心にそう約束した言葉に嘘や

偽りはなかつた。あたりまえみたいに毎日一緒にいたものだから、大きくなつてもずつと一緒にいると思っていた。

自然と一人でいつも遊んでいた公園に、辿りついた。時計を眺めたら21時をまわっていた。

いつまでも一緒に居たかったなあ。

いつかの4月。桜満開の公園で、泣きながら君から別れを告げられた。

大丈夫だよ、泣かないで。絶対また会えるから。  
それは叶えられてはいないけど。

「こんな所でなあにしてんのさ？」

一人感傷に浸っていた俺に、恋人が声をかけてきた。

「べつに

俺は笑つて彼女を見つめた。

「なんだよ、それ。」

あの時君は、俺が一人になると言つて泣いていたね。

大丈夫だよ。

今はもう大丈夫になつたから。一人じゃないから。君が居なくて寂しいけど、でも一人じゃないから。

「つうかお前こそ何してんだよ。」

「…それがねえ、不思議なのよ。」

彼女はいささか眉尻を下げて頭を搔いた。

「私にもよく分からんんだけど…。」

「え？」

彼女は俺の正面に来て、にんまりと笑いながら俺を見上げた。

「急に会いたくなっちゃったつ…じゃあダメ?」

「…まつたく。」

恥ずかしい事を。

それでもそう言ってくれた事が嬉しくて、彼女の手を取る。

「帰ろつか。」

「そうね。」

あの子は元気だらうか?

おそらく俺の初恋で、ずっと一緒にいられると思つてた。ずっと一緒にいると思つてた。

君に会いたいんだ。

その時君が一人じゃないといい。

想い出話を沢山しよう。

聞い欲しい話が沢山あるんだ。聞きたい話が山程あるんだ。沢山話をしよう。

会えたなら。

風が吹いて、桜の花びらが空に舞つた。

完

(後書き)

去年の暮れに提案された三つのお題にて。遅くなりましたが…（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4569a/>

---

風船と時計と夜空

2010年11月19日08時54分発行